《岐阜新聞・岐阜放送賞》

肉を食べる

各務原市立中央中学校　３年
青　山　さわね

皆さん、動物がお肉に変わる瞬間は、いつだと思いますか。

動物の命が尽きたとき？食用のお肉として加工されたとき？スーパーに陳列されたとき？みなさんは、その瞬間について考えたことがありますか。

私は、動物がお肉に変わる瞬間を知っています。その瞬間を見たことがあります。

我が家ではめったにスーパーでお肉を買いません。その代わり、私は赤ちゃんの頃から、母が捕ったジビエを食べています。ジビエとは、鹿や鴨など野生にいる動物や鳥のお肉のことです。ジビエを食べていると話すと、友達からは、

「鹿や猪のお肉をいつも食べているなんて、凄いね。」

と言われることがあります。しかし、私は、これが凄いことだと思ったことはありません。なぜなら、皆さんがいつも食べているお肉も、私たち家族が食べているお肉も、その少し前までは、同じ「動物」だったのですから。

中学一年生の冬。私は初めて母と銃を使った狩りに出かけました。学校が休みだった私が、雪山に行きたいと母に頼むと、母がなぜか鉄砲を出してきて、

「山に行くなら、ついでに鹿を捕ろう。」

と言ったのです。その時の私は、あまり深く考えず、雪山で遊ぶ楽しみで頭がいっぱいでした。

リュックを背負って、かんじきを履いて、母と雪山に入りました。そんな母の背中には、当たり前のように銃がありました。二人でしばらく雪山を楽しんでいると、ふいに鹿の姿が目に入り、思わず息を飲みました。鹿は離れた場所から不思議そうにこちらを見つめています。母は私に目で合図を送り、ゆっくりと銃を構えて、一発。想像よりもずっと大きな銃声が、山の空気を震わせました。銃声が山の中にこだまするより速く、鹿の身体は崩れおちました。一瞬、鹿の身体が消えたように見えました。しかし、母が狙った場所に近づくと、そこには、ちゃんと鹿が横たわっていました。

母は鹿にナイフを刺して、血を抜きました。そして、私は言われるがままに鹿の足を持ち、解体の手伝いをしました。凍えるほど寒い雪山で、まだ温かい鹿の肉が私の手に触れた瞬間、私は手に、まるで火傷したかのような熱を感じました。そして、それと共に「これが、命のあった「証」なんだ。」と強く感じました。これが、私にとって、生き物がお肉に変わった瞬間でした。

寒い雪山で一生懸命生きてきた鹿にも、牛舎の中で大切に育てられてきた牛にも体温が…たった一つの命があります。その命は、人間によって熱を奪われ、人の手によって処理されます。私たちの食卓に並べられた美しいお肉はこうしてできているのです。

スーパー等に行けば、調理するだけのお肉がたくさん売っているのに、なぜわざわざ自分たちで狩りをするのか、疑問に思う人たちもいるでしょう。では、なぜ、私たち家族がジビエを食べると思いますか？栄養のため？ＳＤＧＳのため？いいえ、違います。母の捕ったお肉がおいしいから食べる。それだけです。どんなお肉も「感謝」して大切に食べる。美味しいな、幸せだな、と家族で笑い合う。それが「命に感謝する」ということだと思います。そこにジビエだから、スーパーで買ったお肉だから、ということは関係ありません。

私の両親はよく「自分が動物よりも上だとは思わない。」と言います。命を頂いた相手に対しての敬意を忘れずにいることをいつも大切にしています。牛も鹿も鶏も、体温があり、命があります。そんな当たり前のことを思い出して、感謝する。そうすることで、お肉がもっと美味しく、楽しく、大切に感じられると思います。

今日も私はお肉を食べます。いただいた命に感謝して。